

高山の文化を高めた人々

32

教育の求道者

石原 哲彌

吉朝 則富

(飛騨考古学会編集局)

石原哲彌先生は、幕末の医師阿保春林を曾祖父に、また歴史家で校長を歴任した石原大助を父に持つ、文化の香り高い家系に育ち、自然科学への傾倒と同時に、その生涯を「教育」に捧げられました。

昭和二十五年、上宝第一中学校（現・北稜中）を皮切りに始まった教師人生は、やがて考古学と出会い、また火山灰や下呂石、濃飛流紋岩といった地学研究に方向性を見い出します。それは、子供達が持参する岩石や石器・土器の質問に、正しく答えられる教師を目指すことでもありました。



花里小学校長時代の石原氏

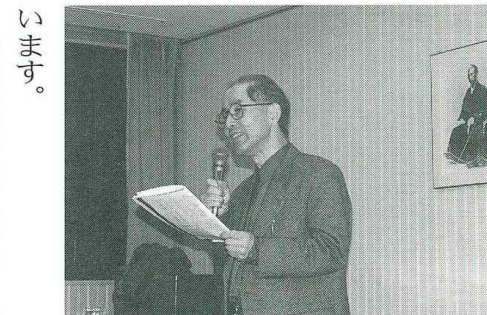
た。その後、日枝中学校での地域に根ざした理科教育は全国的にもその名を知らしめることとなったのです。

日本考古学協会員に推挙された昭和五十七年以降は、白川村木谷遺跡や現朝日町森ノ下遺跡の発掘調査にも主任として活躍されましたが、むしろ得意とされたのは、県歴史資料館勤務の折での古文書研究に触発された人間研究であり、伊能忠敬の飛騨測量をはじめ、二木長嘯・津野滄洲・田中正太郎・江馬修といった、飛騨の考古学研究の先駆者たちの学績の追究でした。そこには学問的成果だけではない、そこに至るまでの人間としての生き方といったものに一層の興味を持たれていた様です。その精神的背景となったのが

かの大正時代の社会教育者、篠原無然（しのはらむね）であった事は確かでしょう。ことある毎に無然を語り、また飲むと必ず無然作の「飛騨青年の叫び」の一節を口ずさめました。

昭和六十年からは飛騨考古学会長として飛騨の考古学界をリード、花里小学校長を最後に定年退職後は、市郷土館嘱託として『上枝村史』等にかかわっておられました。平成四年、乞われて高山市教育長に就任、学校教育や「風土記の丘学習センター」設立などに尽力されました。この頃すでに病魔に冒されていましたが、多忙な職務の合間をぬって若い教員を対象として行った「石原哲彌が語る飛騨通史」の講義は、飛騨史に新しい視点と学術の成果を取り入れ教材化を目指した優れたものであり、聴講者に深い感銘を与えました。

しかし、その後病状が悪化し、余生の研究三昧の夢を果たせぬまま、平成六年八月十九日、不帰の人となられたのです。通夜の晩、小雨の中を先生を慕って立ちつくす数多くの教え子たちが勝久寺の境内を埋めました。まさしく「人間教育」に殉じた清廉な六十五年の人生であったと思



梅村速水を語る石原氏

います。

先生の好きな「ひとりの三十歩前進よりも、三十人の一歩前進の方が尊い」の言葉は、教育者としての理念をよく示すものですが、他方、「心配しないで思いつきやれ！」と励まし、個々の才能を伸ばすことに心を砕かれた面も多々ありました。

蛇足ですが、先生が先鞭をつけられた下呂石研究は、教え子らの「下呂石シンポジウム」の開催といった形で着実に受け継がれ、発展している事を申し添えておきます。

乱れんとする道のため
枯れんとする義のために
濁らんとする世のために

飛騨山郷の任重し
飛騨青年の義は重し
飛騨楽園は夢ならず
（「飛騨青年の叫び」より）